

ブラインド等のひもの安全対策に関する課題と取組の方向性(論点整理)

安全対策に関する論点

ブラインド等のひもによる縊頸(いっけい)事故の未然・再発防止

- 国内では、ブラインド等のひもによる縊頸(いっけい)事故が6件報告されている。うち、死亡事故は1件
- ひも部分のあるブラインド類・スクリーン類を所有する、小さい子供のいる家庭に対するアンケート調査では、約15%で「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」の経験あり。

自分でリスクを知って行動できない子供の安全を守る

商品の安全対策等に関する課題

- コードクリップ、コードフック、セーフティジョイント、ボールチェーン固定具などの安全器具による対策が講じられているが、使用がユーザーに委ねられている、構造上取り付けられないなどの課題がある。
- 海外では、強制法規を施行する国もある。こうした国では安全性の高い商品開発や情報提供も推進されている。
- 消費者安全法における重大事故情報の集約の仕組みが十分に機能していない。

商品の使用実態・消費者の意識に関する課題

- 子供のいる家庭の約3割が、ブラインド類・スクリーン類を所有。
- 購入先は、ハウスメーカー・内装業者等、実店舗がそれぞれ4割を占め、ネット・通信販売が約1割となっている。また、4割の消費者が自分で取り付けている。
- 10年近く使用されるものも多く、買替えによる対策の浸透を待つだけでは不十分
- 警告マークによる周知については、「覚えていない」または「表示はなかった」が全体の約8割を占め、安全器具については「付属していなかった」または「覚えていない」が全体の6割弱であるなど、その周知度や利用の徹底は不十分
- コードクリップ等の安全器具については、約4割が毎回使用していない。

「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」の経験事例と消費者の意識等に関する課題

- 「3才以下の事故が多い」「ひもで遊んでいて首を引っかけるケースが多い」などの傾向が確認された。
- 「ソファやいすの上に登った状態で事故にあった」「安全器具が機能して助かった」「事故の際は安全器具を使用しなかった」などの事例が多くある。
- 「事故が起きるまで危険を感じていなかった」という回答が多く、また、「(原因は)保護者や子供の不注意だった」と考える人、苦情を申し出ない人が多い。

取組の方向性

基本的な考え方

子供の行動は予測できない、子供は自分でリスクを知って行動できないという認識を共有することが重要

そうした前提での、安全性の高い商品の開発・普及を行っていくべきである。そのためにも、事故情報の収集と活用は不可欠

安全性の高い商品の選択、適切な設置、日頃の注意行動を促すため、消費者の安全意識を向上させることが重要

必要な取組

商品構造・デザイン等の安全対策

- ・安全器具と一体化した商品の開発・普及
- ・ひも部分がない・ループが小さいなど、安全性の高い商品等の開発・普及
- ・既に使用されている商品用の安全器具の普及の推進
- 統一基準等の策定による安全対策の徹底

消費者の安全意識の向上

- ・商品や店舗を通じた消費者への積極的な注意喚起
- ・行政等による消費者への広く積極的な注意喚起・効果的な普及啓発
- ・業態を超えた連携による意識啓発(ハウスメーカー、内装業者、インテリアコーディネーター等、流通業者などによる、全国規模での継続的な意識啓発・対策周知)

事故情報等の収集と活用の体制整備

- ・業界としての苦情・相談窓口の設置と事故情報データの活用
- ・商品等を起因とする重大事故情報の集約の徹底